

東京は本当に、「共に歩めない都市」になってしまうのだろうか？

そんな問いかけを、グローバル視点で見た時の「東京」という存在からアプローチすべく、

アーバンコンサルタントであり、都市の未来をデザインする本、「Create the Livable City」(AJ Publishing、2014)の著者でもある Marco Bevolo 氏に話をうかがった。

話は、イノベーションを生み出す都市のチカラから始まり、未来の都市のあり方に及んだ。

新しいチャレンジや、イノベーションへの取組を進める「人」と、その基盤となり、取組を支える「場」。そんな双方の関係が、都市の未来を形づくっていく。

世界から見た東京、その未来

—— 都市のパワーに必要なものは何でしょうか。

Marco 世界レベルで考えると、都市の活力の前提にはまず生活基盤力が必要です。世界には、アクセシビリティ（交通利便性）、インフラ、汚染、そういったものに課題を抱えている都市も多いからです。また、このような、都市の機能要素の充足度だけでなく、同じ機能でも「都市にとってどういう意味を持つのか」、という点で都市の活力が変わることもあります。例えば公園は、癒しや憩いの機能と思われがちですが、イスタンブールでは、反政府活動を象徴する場です。

東京をはじめ、日本の各都市はベーシックな機能は充足し、クリーンで安全。物理的な生活基盤は、世界トップレベルで整っている、といえます。ただ、都市のパワーを考えるということは、もう少し定性的に「Livable」であるかどうか、つまりそこで生活する人がパワーを感じるか、パワーを出せるか、を考えることでもあります。私は、人の未来を考えることから都市の未来がはじまると考えています。ただ、東京は複雑すぎて未来を考えにくいかもしれませんね。

まず、都市のマーケティングという視点で考えてみましょう。

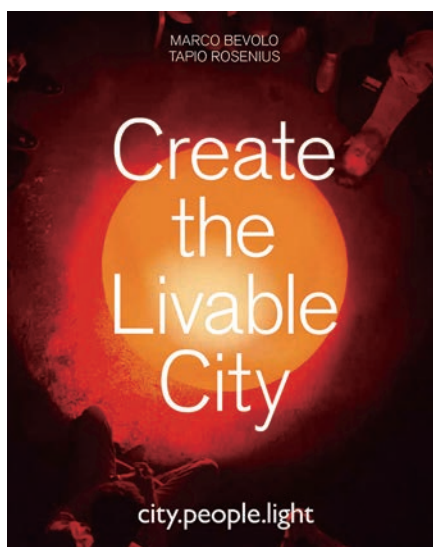
中規模都市は、それぞれのアイデンティティ、ストーリーを軸に据えることで、都市の魅力が高まっていく、あるいは高めていくことができます。たとえばオランダのデザインの首都といわれるアイントホーフェン(Eindhoven、フィリップスが



Marco Bevolo 氏

Phillips Design のディレクターを経て、Tilburg 市(オランダ)のフォーサイト&国際業務のプリンシパル、および Marco Bevolo consulting にてヨーロッパとアジア企業のコンサルティングを行う。また都市ブランドの専門家として、NHTV University にて“Urban Brand Experience”のコースを指揮。Phillips Consumer Lifestyle がリードする NY 市の光プロジェクトを統括。

本社を置く都市)は、テクノロジーをアイデンティティの中心に据えました。この都市のターゲットは、ナレッジワーカー(知識労働者)です。彼らを引き付けるために、テクノロジーだけでなく食品・外食産業と協働し、フードマーケティングにも力を入れています。その結果、アイントホーフェンは、3D 産業、半導体産業でパワーを発揮する都市



Marco Bevolo 氏の著書
『Create the Livable City』

になりました。

ミラノはデザインとファッションをアイデンティティとして、都市のパワーを生もうとしています。決してハイテク都市になろうとはしていません。フロリダは、クリエイティブクラスといわれる人たちが集まる場になろうとしています。

—— アジアでは、シンガポールに人やビジネス、そして教育や医療も集まって来ていますが、どうご覧になりますか。

Marco シンガポールは、私から見るとディズニーランドのような都市です。決して楽しい遊園地という意味で言うのではなく、政府がシステムチックにサポートする、政策組織的な都市だということです。水の問題を抱えてはいますが、都市のパワーとしては「退屈だが機能している」、という感じでしょうか。

—— シンガポールはアジアの都市ではなく欧米の都市だ、という人もいますが、ディズニーランドのような「人工的な部分」は、ポジティブ、ネガティブの両面があるかもしれませんね。

Marco そうですね。一方、東京のような大都市には、一つのアイデンティティやストーリーを当てることは無理です。一見政治も経済も集中化しているように見えますが、単に現状の権力が集中しているだけではイノベーションを起こす

ライバーにはなりません。東京は2020年のオリンピックや金融緩和の影響で、不動産も少しバブル気味です。ただ東京の課題は、成長する都市であるかどうか、ということだと思います。大きいだけに、日本特有のコンサバティブな力が逆作用し、イノベーションが起きにくいのではないのでしょうか。ダイナミズムに欠けているのです。

大都市の未来に必要なこと

—— 東京のような大都市は、今後、「共に歩める街」として魅力と活力を高めることができるのでしょうか。

Marco 大都市のこれからのクリエイティブ活力、ビジネス活力には、多様性を受け入れる力が絶対に必要です。東京には、多様性を受け入れる土壌が、世界基準からみると不足していると思っています。まず、言葉の多様性を受け入れられない。そして、暮らし方の多様性もなかなか広がらない。これが不足しているので、はっきりしたアイデンティティやストーリーを持つ、東京以外の都市の魅力が相対的に高まっているのかもしれない。

また、これからの都市の未来を考えると時には、人の流動性ということが大きなテーマになるでしょう。例えばヨーロッパにはアフリカからの移民が多いのですが、彼らは、ナレッジワーカーや、イノベーターというわけではありません。ただ、ヨーロッパのことだけを考えていては、もはやサステナブルかつダイナミックな都市の未来は描けないのです。いかに他のセグメントと共生する都市であるか。これからのヨーロッパの都市は、もっともっとアフリカに対してオープンであるべきだと私は考えています。

「東京はアジアの中で、どのように人の流動性を受け止めていくのでしょうか？」これが私からの東京に対するクエスチョンです。

—— 2015年には、アセアン経済共同体が発足し、東南アジアでのヒト・モノ・カネの流動性がこれから高まっていくことになります。アジア圏全体を見て、「アジアの人と歩める東京」になれるのか、そんな課題が見えてきました。

インタビューー：松風 里米子
株式会社センシングアジア 代表取締役